

三好達治「黄葉」論

——四行詩における俳句の影響と信州発哺温泉——

元 木 直 子

三好達治が昭和九年七月に四季社から刊行した『閒花集』に「黄葉」という作品が収録されている。

この清麗な朝の この山峡の空の静けさ もの足りなさ……

なぜだらう 私の耳が私に囁く お前一人がとり残されたと

なぜだらう 椽の黄葉の鮮やかさ はや新雪の眩い立山

ああ 彼らは旅立つた この峡の燕らは

「黄葉」は、三好が昭和八年の夏から滞在していた信州発哺温泉で制作した作品である。この発哺温泉の環境が「黄葉」を含む『閒花集』収録作品の制作背景にあることは多くの先行研究で指摘されている^①。また、『南窗集』(昭7・8、椎の木社)から始まる四行詩について、石原八束が「この詩人が幼少のころより試みてきた俳句

の手法と、この印象的写生詩風とがはなはだ似通っていたことを考
えなくてはなるまい」と指摘し、阪本越郎も四行詩という「意識的
な圧縮表現」が「彼の長年にわたって手がけた俳句の手法と似かよ
っており、病中の生活をあまり乱すことなく完遂できると考えたの
である」と述べている。これらの指摘から、四行詩は俳句の写生の
③ 影響を受けていると考えられたきた。このように四行詩を解釈する
上で、環境と写生という二つの要素を結びつけて考える必要がある
のではないだろうか。そこで本稿では、信州発哺温泉に滞在した経
験がどのように作品に影響し、また写生によって発哺温泉の自然が
いかに描かれたのかを、信州に滞在し始めた頃に書かれたと思われ
る「黄葉」を取り上げて考察していく。

三好達治は昭和三年九月に創刊され、昭和のモダニズム運動の中心となった「詩と詩論」の同人として散文詩を書いていた。だが、北川冬彦と共に「詩・現実」（昭5・6創刊）に移った後は、同誌の創刊号に散文詩「獅子」を掲載しただけで、主としてフランス詩の翻訳を手がけるにとどまっていた。その後「詩・現実」からも離れ、三好は「四季」の同人となるまで、自らの詩を様々な雑誌に掲載することになるが、この間の活動について、山田俊幸氏は梶井基次郎の手紙を引き、三好達治、丸山薫らによって「コネサンス」という雑誌が計画されたことを指摘している。結局この雑誌は企画倒れに終わってしまうのだが、三好が自らの詩のあり方を求めた証しと考えられる。このように散文詩を離れ四行詩を書き始めるまでの間、おそらく三好は次第に終息していったモダニズム詩に代わる、次に描くべき詩を模索していたのではないだろうか。昭和七年三月には嗜血し、入院したことも重なって、三好は散文詩から四行詩へと詩形を変化させたのである。後に三好は散文詩を描いていた時代のことを、「思想の真暗などん底にゐた」と振り返り、病後の自分を「私の心の窓を、四方にむかつて、無邪気な女中が掃除にかかる時のやうに、その時分、風の中におし展くことにしたのである。

（略）さうして私は明るくなった」と回想しているように、詩風の変化によって精神的にも明るくなったことが窺える。三好は四行詩という、散文詩とは異なる詩を意欲的に進めていこうとしていたのだろうか。

散文詩から四行詩へという変化は、詩形に伴って自ずから詩に使用される言葉や内容にも変化をもたらすことに通ずるが、三好の詩語に対しての基本的な姿勢は一貫していたようである。三好は散文詩の手法について、「意識の世界に、——ただ意識の世界にのみ心理的に探らうとし」、「日本語として、最も単純な身軽な言葉が必要とした」と述べ、やがて「最も単純な身軽な言葉」を「外界の把握に転用しようと思ひついた。『南窗集』以下の四行詩には、さういふ経路の痕跡がどこかにのこつてゐるだらうか」と述べ懐している。また、三好は散文詩を「非現実のものを、私の空想ででつち上げ」て描いていたが、四行詩は「ただ私の眼前の自然の中から、それだけが何かの表徴である一つの閃光」を受け取り、これを「最も単純な、最も明瞭な言葉」で書きとめたと述べている。つまり、散文詩も四行詩も「最も単純な、最も明瞭な言葉」を用いて詩作するという姿勢は変わらなかったのである。このように散文詩から四行詩への移行は、行分けをしない詩の形式から、四行という制約はあるものの一行の字数制限を設けない形式への変化であり、両者の違いは散文

詩が「意識の世界」を対象とするのに対し、四行詩が「眼前の自然」を詩の中心に据えていることであろう。

最初の四行詩集である『南窗集』(昭7・8、椎の木社)が刊行された当初、四行詩は期待をもって迎えられたが、難色を示す声もあつた。この傾向は『閒花集』に至っても変わらず、賛否両論が寄せられた。このような評価の違いは、例えば昭和九年六月の「文藝」によく表れている。草野心平と井伏鱒二は、同誌五月号に掲載された三好の四行詩について述べているのだが、両者は全く異なる批評を寄せているのである。草野心平は「好評されてゐるかの如き氏の近来の作品は甚だ頼りないものばかりである。この程度に停滞してゐるのなら、三好氏はもうおしまひである。」と述べ、「美の実感は既に最初から捉へられてはゐない」と厳しく批判している。だが一方で井伏鱒二は、「木や霧や動物や風を立体的に且つ音楽的に配置する構図でもつて彼は周到に組み立て、瞬間でもつて恒久を責め出さうとする意志が明らかである」と高く評価している。これらの批評は一例にすぎず、四行詩に様々な賛否両論が寄せられているのは、批評家の好みにもよるだろうが、同時に、当時の詩壇の動向と何らかの関係があるのではないだろうか。

昭和初期に起こつたモダニズム運動は主張の違いにより分裂し、プロレタリア詩運動は弾圧される形で終わりを迎えていた。これら

の運動が終息した後、詩壇を復興しようという動きが見られたのである。昭和九年四月に創刊された「世紀」の「文芸座談会」で、淀野隆三が「三好君から聞いた所では、詩を復興しなければならぬ」と云ふ様な考へ方が、今文学をやつて居る青年の間に起こりつゝある様です」と発言していることからも理解できよう。また、この動きは年を追つことに盛んになつた。例えば、三木清が「詩の復活は最近注目すべき現象である」、「詩の復活」、「読売新聞」昭11・3・3夕刊)と述べ、「文藝」(4巻7号、昭11・7)では、「最近営業雑誌といはれるものが詩をとりあげてきてゐる」、「詩壇展望」と詩が様々な雑誌に掲載されるようになったと指摘している。そして河上徹太郎が「文學界」誌上の座談会において、「ごく最近に詩壇復興といふ言葉があるだらう。あれはほんとだと思ふんだ」、「詩と現代精神について」昭11・8)と発言している。これらの言葉を裏付けるように、詩雑誌「コギト」(昭7・3)や「四季」(昭9・10)、「日本浪漫派」(昭10・3)等が次々に創刊されている。

このような一連の詩壇の動向を総括したものに、神保光太郎の「詩」(「文藝」4巻12号、昭11・12)がある。このなかで神保光太郎は「詩苑はこの数年、歌はない時代を深刻に通過してきた。心理描述、絵画的描出等の傾向をのみ辿つてきた。これは自由詩の勃興に依りあまりに浅薄に歌ひ過ぎた反動でもあつた。これが、最近文

学界一般の詩的精神の高揚に煽られ、(略)歌はんとする欲求が熾烈となつた」とまとめている。同様に、三好が「新散文詩以前と以後をもう一つ考へて見るのに、ポエジーの表現を音楽に近接して考へるが、絵画的イメージとして表現するか、これは萩原さんと僕との考への差異でもあるし新散文詩の以前と以後の一面から見た分れ目である」と指摘している。このように、詩壇復興とは散文詩のよ^⑫うな感情を描く詩から感情を歌う詩へと移行していこうとする運動であつたといえよう。また、神保光太郎は詩壇復興の流れのなかで「詩の本質を音楽に近しとする萩原氏と絵画的心理を重視する三好達治氏の論争」「詩」、「文藝」昭11・12)があり、この論争の過程で生まれた作品として三好の四行詩を位置づけている。つまり、三好の四行詩は感情を歌う詩が叫ばれるなかで描く詩、絵画的な詩として、詩壇から批判される結果となつたのである。だが、三好が散文詩から出発した詩人ということだけで、詩壇が三好を絵画的な作品を描く詩人と見なしたわけではない。三好が四行詩を絵画的に表現する方法を採つた理由は、先に神保光太郎が指摘した雑誌「四季」で行われた萩原朔太郎との論争での発言から窺い知ることができ^⑬る。

この論争は、朔太郎の詩集『氷鳥』をめぐる議論と、『純正詩論』をめぐる議論とに大別できる。この二つの論争のうち三好の詩に対

する考えがより明確に表れているのは後者である。この論争は三好が昭和十年四月に刊行された『純正詩論』の書評である。「日本語の韻律」を、「帝國大學新聞」に掲載したことに端を発し、主として「四季」を舞台に互いの主張が戦わされた。三好は朔太郎が「詩歌の音韻的效果を最も尊重し拍節や韻律の、漢詩や西詩におけるが如き詩的效果を我等の詩歌の上にもまた期待」^⑭していることを到底無理なことだと非難した。この主張に対し朔太郎は三好が「日本語詩の音楽性を不必要とし、印象性のみ表現を主張して居る」と否定し、「詩の第一義的条件が、実に音楽性そのものに有る」^⑮ことを強調した。

馬渡憲三郎氏はこの論争について、「客観的な印象描写と素朴な抒情精神を重視する三好達治と、感情の詠嘆に重きを置いた萩原朔太郎との相違」^⑯とまとめているが、ここでは、この論争のなかで三好が俳句を用いて自己の詩に対する姿勢を主張していることに注目したい。なぜなら三好は最後の反論となつた「燈火言」(「四季」12号、昭10・11)のなかで、俳句が「俳諧的手法による、詩的印象の具象性」によつて詩歌として存在していることにヒントを得て、自らの詩においても「詩的印象」を眼目とした「特殊なる印象派的詩歌の創設を企て得ないものかどうか」と述べているからである。もちろん言語を、「一面声であると共に、一面に於て意味観念」であると考

えてはいるが、特に「言語の観念性」で、「一派の詩歌」を創設しようとしていたのである。三好はこれを「言語の観念性を主眼とする詩派」と呼んでいる。さらに漢詩も「印象的詩派」と認め、この二つの例を高く評価し、三好は自らの詩でも「印象派的詩歌」を成立させようとしていたのである。この観念が四行詩を描いていた時期

の三好の詩作態度であり、四行詩のあり方を示しているといえよう。

二

三好達治が詩に興味を持ち始めたのは、中学生になった頃で、「近所にその学校の卒業生で俳句をひねくる青年がゐた。雑誌の『ホトトギス』を読んでゐるのがたいへん洒落た恰好に見えたから、私も『ホトトギス』を買つて読んでみ¹⁴」たのがきっかけであった。さらに内藤鳴雪の『俳句作法』¹⁷を購入し俳句を作り始めたのである。その後、中学二年の時に大阪陸軍地方幼年学校に移つてからも「子規や虚子の俳句を読むやうになり、雑誌『ホトトギス』を愛読し、自分でもひそかに我流の俳句を前後二千句ばかりは作つた¹⁵」、「私なりの我流で、『ホトトギス』の模倣をしてゐた¹⁶」と思ひ返している。三好が「ホトトギス」を読み出す以前から、雑誌の中心人物であつた高浜虚子は俳句を「形式を先にして生まるゝ文学」と規定し、「十七字、季題趣味といふ二大質の上に立脚¹⁸」したものと主導して

いた。三好は伝統に則つた「ホトトギス」の俳句に影響を受け、自らも句作を行つていたのである。

また、三好が中学校に入学した大正三年、「ホトトギス」は青田青峰が三千部の売上を目標とした一年が過ぎ、「来る一年は五千部六千部を目標として邁往精進すべき機運に立至りました¹⁹」と宣言するように雑誌の勢力を伸ばそうとしていた時期にあたる。したがつて、「ホトトギス」は世間に多く出回り、三好も入手しやすかつたのではないだろうが。また、「ホトトギス」誌上では、虚子の「俳句の作りやう」(大2・12、大3・9)が連載され、俳句に興味を持ち始めたばかりの三好にとつて恰好の読み物となつたと思われる。「俳句の作りやう」でも虚子が主導していたのは、写生という俳句の手法で、特に主観に重点を置いた主観写生であつた。虚子は俳句の手法について、「たゞ眼で見たり耳で聞いたりしたものを其儘写生しただけでは不満足²⁰」であつて、句として成り立つためには、「或主観の働きを加へ若くは主観の色彩を加味²¹」すべきだと主観写生を主張している。三好はこのような虚子の主観写生の俳句に親しみ、感化されたのであろう。そして少年期に培つた季語を重視し、写生を行うという句作法が四行詩を制作する下地を作つたと考えられる。では、三好が四行詩を詩作していた頃、俳壇はどのような状態にあつたのだろうか。昭和に入つて虚子は花鳥調詠を唱え、ますます

「季」を重視する方向へ進み、一方で「ホトトギス」派に反発する形で盛んに新興俳句が叫ばれるようになっていた。これは十七文字定型を破り、無季題とし、時代性を反映した俳句を作ることによって俳句の存在意義を明らかにしようとする運動であった。このような俳壇にあつて、三好は「俳句と季題」(「俳句研究」昭11・7)を發表し、加藤秋邨から「現代に於ける俳句の重要問題によく触れたもの」⁽²⁴⁾と高い評価を得ていることから、三好がいかに俳句に精通していたかが窺える。この評論で三好は「単なる約束と云はんよりは寧ろ必然の手法とも称すべき、重要不可欠の生命線のやう」であると季題の重要性を説き、「ホトトギス」派を擁護した。また、三好は「俳句の詩形そのものが、既に印象的写生詩、写生的感慨詩としての所謂俳句の性格から決定されたところの短小詩形」なのであつて、「無季俳句の心理詩形」には向かないと考へていたのである。つまり俳句が自然を写生する点では優れているが、心理描写には限界があると認識していたのである。したがつて、三好が心理描写が中心となりがちな散文詩からの脱却をはかつたとき、少年時から慣れ親しんでいる俳句の利点を生かすことよつて新境地を開こうとしたと考へられる。技法として写生を用い、俳句の「詩的印象の具象性」を自らの詩に取り入れながら、「印象派的詩歌」を四行詩で確立しようとしたのだらう。

三好は四行詩の詩法を次のようにまとめている。

詩人の胸裡に油然と湧き起る詩懐詩情を、詩人が自ら反省して、その因つて来るところの機構環境と誘因縁縁とを探究し、それを最も簡単に最も明瞭に書き留める——即ち写生することに依つて、一篇の詩を創作する。さうしてその作品をして、読者の胸裡に、先に詩人の胸裡に油然と動いたものに等価のものを生ぜしめる。⁽²⁵⁾

この詩作法は、「ホトトギス」から影響を受けた三好が写生を四行詩に応用するときの方法として見て取れよう。つまり、詩人が受けた印象を簡潔な言葉で構成し、詩語の観念性によつて詩人の胸の内を讀者に伝える手法である。

そこで「黄葉」第一行に戻れば、「この清麗な朝の この山峡の空の静けさ もの足りなさ……」では、朝の清麗な山峡が写生され、また詩人の受け取つた「静けさ」「もの足りなさ」という印象によつて、簡潔に描かれているといえよう。

三

阪本越郎は「黄葉」を「信州志賀高原の秋の写生」⁽²⁶⁾と位置づけている。実際、「黄葉」で三好達治が写生したと考へられるのは、主に「立山」「燕」の二つである。まず、前者の「立山」であるが、

第一行では「山峡」と抽象的に記され、読み進めていくと第三行で詩人が「立山」の見える位置にすることがわかり、具体的な場所へとイメージが固定されていく。この場所は三好が滞在した信州発哺温泉で、ここから眺めることができる北アルプス連峰の一つが「立山」なのである。

信州発哺温泉は昭和七年三月に咯血し入院した後、神経性心悸亢進病に悩まされていた三好が療養に赴いた地である。三好が昭和八年、「阪神間の夙川の甲南荘という下宿屋」にいた「三高時代の同窓の吉村を訪ねてきたとき」に知り合ったという生島遼一は、病後の療養地として「たしか大島へ行くよつなことであつたのを、私と桑原で、私達がよく行つていた長野県の発哺温泉へ行かないかとすめた」と証言している。

三好が療養先に決めた発哺温泉は、『山ノ内町誌』（昭48・3・1）によると、「明治八年になってようやく湯宿がおかれ温泉場として開かれた」地である。また、『長野県町村誌北信篇』（昭11・5・30）の明治十五年八月の報告で、発哺温泉は「深山幽谷にて雪中通路不能 故に其効有りと雖も、夏時唯遠近の病客沐浴して其効を知り、避暑に宜し。逆旅二戸、一ヶ年浴客五百人」と記されている。この地の標高は一六〇〇mもあり、三好が訪れた昭和八年でもバスは麓の上林温泉までしか通じておらず、発哺温泉へは徒歩で登

らなければならなかった。また、「逆旅二戸」とは天狗の湯と薬師の湯と呼ばれている二つの温泉宿で、三好が滞在した宿は天狗の湯である。天狗の湯は、昭和三年から毎夏訪れていた桑原武夫によると、「当時は茅ぶき、入り口のわきに清水が落ちていて、そこで足を洗って上がると、帳場にはいろりが切つてある、という質素な山の温泉宿」にすぎなかった。現在でも天狗の湯には三好が訪れた当時の宿の柱が残されている。このような温泉宿について、三好が「天狗の湯のひなびたかまえ、ここから眺める北アルプスのパノラマ、ことごとく気に入って」いたと桑原武夫が述懐している。三好自身も「発哺といふところは、その清涼な気候よりも、その新鮮な岩魚よりも、何は措き、その雄大な眺望によつて忘れ難い。（略）所謂日本アルプスの連峰が一眸のうちに集つて、清麗な夜明けにくつきりと浮び出た展望は、到底私などの筆力には写し得ない」と述べている。

実際、昭和八年八月から発哺温泉天狗の湯に滞在し始めた三好の心を捉えたのは北アルプスの山々で、なかでも初雪の降つた姿に感動したよつである。昭和八年九月十三日付の井伏鱒二宛の書簡では、「宿の庭から一列に見はるかす日本アルプスの連山には、既に新雪が降りました、甚ださつぱりとした気持です」と伝えている。また、昭和十年の九月下旬、宿から立山と剣岳の頂に新雪が降つたのが見

え、「ひとつ時廊下に停んで、しみじみと見惚れてゐた。一昨年のも秋も、私はこの廊下に立つて、感慨深く、この初雪を眺めたものであつた」と回想している。「一昨年のも秋」、つまり初めて発哺温泉天狗の湯に滞在した年の、初秋の山に降つた初雪を印象深く覚えていたことになる。北アルプスに降る初雪の姿を目にしたときの三好の感動は計り知れないものだらう。しかも二年が経つても「その日その日の、異つた私の心を迎へて、依然として変わらない山々の姿は、なほ嘗て私の目を厭かしめることがない」と自然の雄大さを賛美する三好の謙虚な姿勢は変わらなかつたようである。三好はこの時に見た北アルプスの風景を次のように書き記している。

越の山 信濃の山に

雪ふりぬ

雪のかがやき

見れどあかなく

また、三好が発哺温泉天狗の湯から「初秋の頃、新雪をかつむつて一そう輪廓の鮮やかになつた、この日本アルプスの秀峰を眺めてゐるのは、まことに世外の逸興」と振り返る景色は後年まで記憶に残るものであつた。

そこで、「黄葉」第三行「椽の黄葉の鮮やかさ はや新雪の眩い立山」は、近景の椽の木の葉が黄色に色づいた様子と、遠景の藍色にそびえ立つ北アルプス連峰の中でも初雪が頂に見える立山の写生となつている。また、近景と遠景の対比によつて詩空間に広がりを持たせ、秋から冬へと移り変わる季節の微妙な変化を示唆している。さらにこの描写には三好の視点が大きく関わっている。三好が感動した自然の雄大な姿を写生しつつ、自然を眺めることによつて感じた印象を簡単、明確な言葉で表現しながら、「鮮やかさ」「眩い」という言葉の持つ色彩や語感によつてこの風景描写が精彩を放つものとなつているのである。

次に「燕」であるが、三好は信州発哺温泉で「建物の軒端をめぐつて、隙間もないほど、腰の白いはつばめがぎつしりと巣を懸けてゐる光景を眼にしている。したがつて、作品中の「燕」は岩燕を指していると考えられる。実際、『山ノ内町誌』によると、岩燕は「元来、幕岩や高原内の山々の断崖に営巢していた」が、「天狗の湯では、大正一五（一九二六）年、別館完成後移り棲みつ」き、「首雜期は壯觀な眺め」を見せるといつ。後に中谷孝雄が三好と共に避暑のため上林温泉から発哺温泉に訪れたときに、天狗の湯から「すぐ眼の下の白樺の樹林に覆はれた谷の空には、いつも岩燕の群れが軽快に飛び廻つてゐた」と述べていることから明らかである。

また、岩燕は三月下旬に渡来し、「九月下旬までにはほとんど渡去する」という習性と、三好が昭和八年八月三十日付の桑原武夫宛の書簡で「いつとなくこの一山の岩つばめ数をへりつつ秋深みけり」と詠んでいることや、「おしゃべりの岩つばめたちが、この宿の軒端を出発したのは、九月の廿日前後であつた。彼らは幾組かに分れて、次々にこの山峡の空から姿を消した」という記述とほぼ一致する。

この描写が「黄葉」第四行「ああ 彼らは旅立つた この狭の燕は」に相当し、第一行の山峡の「静けさ もの足りなさ……」の原因ともなっている。三好は天狗の湯から岩燕を観察し、その南下によって秋の終わりを感じ、岩燕が発喃温泉から飛び去ったことを写生することによって季節感を表現しているのだろう。

また、岩燕という鳥を扱ったということで、高浜虚子が唱導した花鳥諷詠との関係を見ていく。花鳥諷詠とは、「春夏秋冬四時の遷り変りによつて起る自然界の現象並びにそれに伴ふ人事界の現象」である花鳥風月を詠むことである。三好が俳句に精通した詩人であることはすでに述べた。実際、自らの俳句を「俳句研究」（昭10・8）に掲載したり、第三の四行詩集である『山果集』（昭10・11、四季社）を虚子に送り、この詩集に収録されている「雷蝶」が「季のものをついた詩」としてそのフランス語訳と共に「ホトトギス」（昭11・12）に紹介されたりしている。このように虚子と交流して

いた三好が「我々の国の所謂日本的なる伝統のものあはれ、ものあはれの文学的結晶と言つてもよろしからうところの風流、その風流の四つの象徴の花鳥風月」と述べていることから花鳥諷詠に影響を受けていたと考えられる。三好は花鳥風月のなかでも「最も人の心に複雑な訴へ方で訴へ来るものは、（略）かの羽族でなくてはならない」と考えていることから、特に鳥を重要視していたことがわかる。

三好の鳥好きは周囲に知られていたようで、津村信夫が信州に滞在中の三好を訪ねたとき「なんと云つても、小鳥は人間より傑作だね」と言い、「小鳥の歩みに深く見入つてゐた」という証言からも窺える。さらに、三好は鳥を「その歌声や、その姿態や、その羽翼の賦彩、さういふ自然の瑣細な表現の間に、我々の普段の自然な心理状態と何かびつたり呼応する準備がある」動物として捉え、また「かの鳥好きの心は、またやがてものあはれを知る心に最も距離の近い——と言ふよりも寧ろ両者は一つのものと言つてもいいほどの相似通つた心情ではあるまいから」と考えていた。つまり、三好は自己と鳥の心情を同一視し、鳥の鳴き声や行動を描くことで自分を表現していたと考えられる。

三好は、発喃温泉から次々に飛び立つた岩燕たちを見ているが、「彼らのうちのあるものは、発育の遅れた巣立ち前のその雛を、恐

らく何か逼迫した理由から、あはれにも古巢の底に見棄てたままで、最後の群に加つて南に帰つた」という姿も眼にしている。このような岩燕の雛が残された光景と、「夏の間は、時とすると泊り客が百人を超える」天狗の湯が、「九月半ば、山地は既に秋づいたころ、避暑客はみな宿を發つて、私一人が、その後ひとり残された」という依然として病氣療養のためにこの宿にとどまらなければならなかつた三好自身の寂しさや孤独感が重なつて、「黄葉」第二行「お前一人がとり残された」という表現につながっているのだろう。したがつて、「お前」とは、三好自身が一人残されたことであると同時に第四行の伏線となる岩燕のことであるといえよう。

四

三好達治は、昭和八年五月一日に「帝國大學新聞」に四行詩「一家」「厩舎」「新緑」「チューリップ」を掲載した後、同年八月から発喘温泉に病氣療養に来ているが、翌年二月まで四行詩は發表してない。その間、主にフランス詩の翻訳に追われていたのである。この翻訳の仕事を三好は「半ば智的で半ば機械的な仕事」と呼び、さらに翻訳のための「疲労の現象」は「私のやうに永らく孤独に慣れた者には不思議な魅力をもつてゐる。そこには一人の私と、もう一人の私との間にとり交はされる、慰めと戦慄に満ちた会話があ

る」といつのである。この「慰めと戦慄に満ちた会話」とは次のように書かれている。

そして自分に命ずる、「荷物列車のやうに！」やがて夜明けがくるだらう、そして、展望の風景がまた変わるだらうから、そんな風に私は身を躲す、お前一人ぢやない、お前一人ぢやない、私よ、私一人のことぢやないのだ。(「山居」)

私に向かつて必死に励ますもつ一人の私との会話である。また、「山居」と同時期に書かれたと思われる、「山泉雜記(二)」を見てみる。

これではならぬぞ！と思ひながらも、秋が私を悲しくした。それは、季節のせぬばかりでもなかつたらう、都会育ちの私には、こんな山間の村が退屈でならなかつた。私は自分を支へる何の手だても知らなかつた。これではならぬぞ！私は日向でよく自分を励ました。

これも自分との対話である。そこで、「黄葉」第二行の「なぜだらう私の耳が私に囁く お前一人がとり残された」とでは、「私の耳が私に囁く」という「一人の私と、もう一人の私」の対話が描かれている。「山居」にあるように、朝になれば展望の風景が変わり、孤独な自分から抜け出せるはずと考えていたが、その状況は朝になつても結局変わることはなく、にぎやかだつた岩燕達が去つたこと

により寂しさが増す結果となってしまうたのである。第二行最初の「なぜだらう」は、第一行の「静けさ　もの足りなさ……」に対しての言葉であり、第二行の「私の耳が私に囁く」という会話する「私」への疑問でもある。したがって「なぜだらう」は、第一行と第二行をつなぐ役割を果たしているといえよう。

「なぜだらう」という言葉は第三行にも出てくるのだが、この言葉が使われている他の四行詩を見てみる。

休みなく歌ひながら　せつかちに枯木の幹をノックする　啄木

鳥

お前を見てゐる私の眼から　あやふく涙が落ちさうだ

なぜだらう　なぜだらう　何も理由はないやうだ

風の声　水の音

（「空山」昭9・2）^⑤

山毛櫨の林　榎の林　白樺の林　ひと年私は山に住ひ　彼らの

春の粧ひと

彼らの秋の凋落を見た　けれども彼らの裸の姿　雲の上のたた

すまひこそ

わけても私の心にしみる　何故だらう　そのことわけを問ひな

がら

今日もまた林に憩ふ　やうやく私のものとなつた　この手足この老年が珍らしく
（「空林」昭11・5）^⑥

「空山」では、啄木鳥の鳴き声や動作を見て、涙を流しそうになっていることに対して「私」は「なぜだらう」と思っている。だが、「理由はない」とはっきりした原因は明らかにされていない。また「空林」では、自然のありのままの姿が「私の心にしみる」ことに對して「何故だらう」とその訳を考えながらも、その理由はわからないままとなっている。「黄葉」を含むこれら三篇は「なぜだらう」という疑問を提示しているがその答えは詩の中では書かれていない。共通するのは、自然の営みが「私」の心に深く感じ入ったときに「なぜだらう」と思うことである。三好は、季節の移り変わりに伴う鳥の様子や山などの微妙な変化による美しさを捉える一方で、何も変わることのない自分との距離を感じているのではないだろうか。國中治氏が「山泉雜記」のような散文に比べ、「四行詩『黄葉』では、私」の孤絶感が中心に据えられてい」と指摘しているように、発喃温泉の大自然の写生は三好の賛美でもあり、逆に自らの孤独感を浮き彫りにさせる結果となっているのだらう。三好は翻訳の仕事の合間に、詩人として信州の雄大な自然を写生し、寂しさや孤独感を凝縮して簡潔な言葉で四行詩に表現したのである。

また、「空山」「空林」では、自然の描写の後に「なぜだらう」という言葉が配されているが、「黄葉」は「椽の黄葉の鮮やかさ」や新雪の眩い立山」の前に「なぜだらう」が置かれているという違いがある。この配置は第二行と形式的なバランスを取るためではないだろうか。さらに、第二行「なぜだらう」以下「私の耳が私に囁く、お前一人がとり残された」とは三好自身の孤独感を表現していると同時に、第四行の「ああ 彼らは旅立つた この狭の燕らは」にも掛かっていく。第二行から第四行へ読む進めていくと、岩燕が南下するのは当たり前の現象なのだが、第二行に立ち戻って、なぜ親鳥は雛を残したまま去っていったのだったのだろうかという三好の寂しい思いも感じられる。このように、第二行、第三行の行頭「なぜだらう」は、他の行にも影響し、各行の意味が重層的に絡み合った詩となっている。

「黄葉」は、三好達治が少年時代に培った俳句の教養が下敷きとなって、自らの詩において「印象派的詩歌」を作り出そうとしていた四行詩である。発哺温泉に滞在し始めた頃の作品であり、雄大な自然に囲まれて感動し写生する一方で、三好が置かれている状況に孤独感を敏感に感じ取って表現した詩と考えられる。この詩は、四行詩という詩形が充分に生かされ、簡潔で明瞭な詩語によって内容

と構成が一致しているといえよう。

注

- ① 河盛好蔵は、「三好君はこの三つの詩集を書いた時期に、しばしば、信州発哺温泉に療養のため永く滞在したことを誌しておくことも無駄ではあるまい」(「解説」、『三好達治詩集』所収、272頁、昭26・2・10、新潮社)と述べ、阪本越郎は、「開花集」所収の詩の大部分は、この高原の眼前属目の自然の風物を題材とした、明るく軽やかな四行詩である」(「開花集」、『日本の詩歌22 三好達治』所収、100頁、昭42・12・15、中央公論社)と指摘している。
- ② 石原八束「狂風の詩人」、『三好達治』所収、168頁、昭54・12・15、筑摩書房)
- ③ 阪本越郎「南窗集」(『日本の詩歌22 三好達治』所収、88頁、昭42・12・15、中央公論社)
- ④ 山田俊幸『四季』と、その創刊(『日本現代詩研究者国際ネットワーク』編『日本の詩雑誌』所収、165頁、平7・5・13、有精堂)
- ⑤ 三好達治「ある魂の経路」(「知性」3巻2号、昭15・1)。全集四巻79頁。
- ⑥ 三好達治「私の詩作について」(『現代詩講座 第二巻』所収、昭25・5・30、創元社)。全集六巻203頁。
- ⑦ 注⑤に同じ。全集四巻79～80頁。
- ⑧ 草野心平「詩壇を切る」(『文藝』2巻6号、昭9・6)。これは、昭和九年五月の「文藝」に掲載された三好達治「旅情歌」(「千曲川」)「椽の作者」(「雪景」)「雉」(「早春」)に対する評価である。井伏鱒二の「文芸時評」も同じ作品を対象としている。

- ⑨ 井伏鱒二「文芸時評」(「文藝」2巻6号、昭9・6)。このなかで井伏は、三好達治が「ある魂の経路」で回想したように、「彼の詩がいつも天地自然からの記念の片身わけであるやうに見える」と述べている。
- ⑩ 浅見淵・尾崎一雄・川崎長太郎・古木鐵次郎・外村繁・丹羽文雄・淀野隆三・緒方隆士・小田嶽夫・北川冬彦・田畑修一郎・中谷孝雄・三好達治、「文藝座談会」(「世紀」創刊号、昭9・4)
- ⑪ 萩原朔太郎・北川冬彦・三好達治・小林秀雄・河上徹太郎・舟橋聖一「詩と現代精神に關して」(「文學界」3巻8号、昭11・8)
- ⑫ 萩原朔太郎・三好達治・丸山薫・神保光太郎・立原道造、「現代詩の本質について——四季座談会」(「四季」24号、昭12・2)
- ⑬ 三好達治「日本語の韻律——萩原朔太郎氏著『純正詩論』読後の感想——」(「帝國大學新聞」、昭10・5・6)。全集五巻29頁
- ⑭ 萩原朔太郎「詩壇時感」(「四季」10号、昭10・8)
- ⑮ 馬渡憲三郎「昭和詩論の問題」(「昭和詩史への試み」所収、90頁、平5・3・12、朝文社)
- ⑯ 三好達治「放下著——人の世の道のなかばに——」(「文學界」8巻5号、昭29・5)。全集九巻177頁。
- ⑰ 内藤鳴雪「俳句作法」(明42・3・20、博文館)。この書は、通俗作文全書のなかの二冊で、「初学の為めにするもの」(凡例)とある俳句入門書であった。また、大正十一年五月一日に第十九版が発行されていることから、広く世間に普及した書物であることがわかる。
- ⑱ 三好達治「文学と私の生活」(「帝國大學新聞」、昭13・10・24)。全集八巻117頁。
- ⑲ 三好達治「詩歌の思出」(「短歌研究」8巻6号、昭14・5)。全集六巻233頁。
- ⑳ 高浜虚子「俳句入門」(「ホトトギス」16巻12号、大1・9)
- ㉑ 青田青峰「消息」(「ホトトギス」17巻4号、大3・1)
- ㉒ 高浜虚子「進むべき俳句の道」(「ホトトギス」19巻3号、大4・12)
- ㉓ 三好達治「俳句と季題」(「俳句研究」3巻7号、昭11・7)。全集四巻50～51頁。
- ㉔ 加藤秋邨「俳句展望」(「新潮」33巻10号、昭11・10)
- ㉕ 三好達治「詩壇十年記」(「若草」昭12・5、未見)。全集九巻238頁。注③に同じ。109頁。
- ㉖ 生島逸一「同郷の友三好達治」(「新潮」52巻12号、昭30・12)。引用文中の「吉村」は吉村正一郎を、「桑原」は桑原武夫を指す。
- ㉗ 山ノ内町誌刊行会編「山ノ内町誌」第三章「近世の社会」638頁(昭48・3・1、同町)
- ㉘ 長野県編「長野県町村誌北信篇」平穂村(昭11・5・30、986頁、長野県町村誌刊行会)
- ㉙ 三好達治「山泉雜記」(「帝國大學新聞」昭9・1・1)。全集十巻58頁。「信州上林温泉から二里半ばかり奥に入った発哺といふところ、旅館が二軒きりの、その一軒の天狗の湯といふのに夏から冬のはじめまで私は百日余り滞在した」と記している。
- ㉚ 桑原武夫「志賀高原と三好達治——病身を休めた山の温泉宿——」(「朝日新聞(夕刊)」、昭48・10・11)
- ㉛ 三好達治「信州発哺温泉」(初出不詳。「風蕭々」所収、昭16・4・20、河出書房)。全集十巻124～125頁。
- ㉜ 三好達治「書簡」(井伏鱒二宛、昭和八年九月十三日付、長野県下下高井郡発哺天狗ノ湯二テ、東京杉並宛、葉書)。全集十一巻509頁。
- ㉝ 三好達治「新雪遠望」(初出不詳)。全集十巻64頁。注③に同じ。全集十巻65～66頁。
- ㉞ 三好達治「志賀高原」(初出不詳。「現代紀行文学全集 第三巻」所収、

- 昭41・9・30、修道社。全集十一卷162頁。
- ③7 三好達治「鶯・鴉・燕」(「新潮」33巻7号、昭11・7)。全集十巻6頁。
- ③8 注②8に同じ。第八章「動物」。342頁。
- ③9 中谷孝雄「日本浪漫派」(「新潮」24巻11号、昭44・11)。昭和十年春中谷孝雄は、「日本浪漫派」の同人緒方隆士の病氣療養のために、上林温泉滞在中の三好達治を訪ねた。先に緒方隆士を静養のため発哺温泉天狗の湯に向かわせ、その後三好達治が中谷孝雄を「発哺から見る北アルプスの眺めには遙に素晴らしいものがあるよ」と発哺温泉に誘ったのである。
- ④0 注②8に同じ。第八章「動物」。342頁。
- ④1 三好達治「書簡」(桑原武夫宛、昭和八年八月三十日付、発哺より、京都宛、葉書)。全集十二巻455頁。
- ④2 注③0に同じ。全集十巻58頁。
- ④3 高浜虚子「花鳥諷詠」(「ホトトギス」32巻5号、昭4・2)
- ④4 三好達治は「俳句研究」(2巻6号、昭10・8)に、「句帳から」と題し、「こすもすや干し竿を青き蜘蛛わたる」「柿落葉家鴨よこれて眠りたる」「鴨どりの横顔みたり瓜の宿」「初夏や小鳩の趾の桑鼠」「今日もまたここにきて河鹿ききにけり」の五句を発表している。
- ④5 「雷蝶」とそのフランス語訳は「ホトトギス」(40巻3号、昭11・12)に掲載された。「雷蝶」の初出は、「四季」(6号、昭10・3)にある。
- ④6 三好達治「痴人饒人」(初出不詳、「風蕭々」所収、昭16・4・20、河出書房)。全集九巻135頁。
- ④7 注④6に同じ。全集九巻135頁。
- ④8 津村信夫「自然のこと——信濃での二人の兄の想出に」(「椎の木」昭11・1、「津村信夫全集 第三巻」所収、昭49・11・30、36頁、角川書
- 店)
- ④9 三好達治「小鳥その他」(「中央公論」56巻3号、昭16・3)。全集十巻222頁。
- ⑤0 注④6に同じ。全集九巻135頁。
- ⑤1 注③0に同じ。全集十巻58頁。
- ⑤2 注③0に同じ。全集十巻60頁。
- ⑤3 三好達治「鶯」(初出不詳)。全集十巻40頁。
- ⑤4 三好達治「山居」(未定稿)。全集十二巻307〜308頁。
- ⑤5 三好達治「山泉雜記」(未定稿)。全集十二巻306頁。
- ⑤6 三好達治「空山」(「文藝評論」1巻2輯、「セルパン」36号、昭9・2)。全集一卷168頁。
- ⑤7 三好達治「空林」(「文學界」3巻5号、昭11・5)。全集一卷211頁。
- ⑤8 國中治「三好達治における口語四行詩とその周圍」(「神戸松蔭女子学院大学・短期大学 研究紀要」41号、平12・3)
- (付記)
- 本稿で引用した三好達治の詩及び隨筆は、『三好達治全集』全十二巻(昭39・10・15〜昭41・11・1、筑摩書房)を底本とする。原則として漢字を新字体に改め、ルビは省略した。なお、本文中では「全集」と略記した。